



special feature

天売島 地域協働
フィールドワーク



econ. no.050

Hokkai-Gakuen University Faculty of Economics



～「プロジェクトで島を元気に!」学生たちの夏の挑戦～

学生が地域と長期間関わりながら、地域の課題や可能性を探り、主体的に課題解決を提案・実行する現場実践型授業「地域協働フィールドワーク」。毎年、学生が天売島に1週間滞在し、自分たちで考えたプロジェクトを実践しています。参加するのは自主的に応募した学生のみ。そんなアツい学生たち6名に、今年のプロジェクトや昨年の活動の様子について話してもらいました。

[2024年6月27日に実施]



特集座談会の様子

自ら考え、実践する
課題解決のプロジェクト

司会 「地域協働フィールドワーク」は今年9年目を迎えました。専門ゼミよりもっと地域を深く知りたい欲求が教員にもありましたが、今のゼミの枠組みでできることは限定的です。そこで「別枠で授業を作り、決まった地域へ実際に行き、学生主導で地元の人とともに地域の課題解決を図れないか」という教員の悪だくみから始まりました。これには、過疎地域の課題解決ができる人材を育成するという目的もあります。島であれば、経済や人のあり方、課題はなにが見えやすいと考えて天売島に決め、どうしたら島がもっと良くなるのか、島の人たちとともに課題解決に取り組みます。今日集まってくれた6名のうち5名は今年が活動2年目。どういう思いで取り組んでいるのか、率直に話してほしいと思います。年間スケジュールは、募集で決まったメンバーが5月に顔合わせをしてチームを作り、6月の島への事前訪問でどんな活動をするか具体的に決めて、8月に1週間滞在して実際に各プロジェクトを動かしていく。そして9月のオープンキャンパスで活動の成果を公開する、という流れです。全体のプロジェクトと個人のプロジェクトがありますが、それぞれどんな活動をしようと考えているのか、具体的に教えてください。ま

ず、全体のプロジェクトは?
佐藤 全体のプロジェクトは、活動拠点である島の交流スペース「てん」で居酒屋を開くこと、居酒屋に来られない人に向けたメニューの宅配サービスの実施、島の人の困っていることを解決する「なんでも隊」の結成、の3つです。

高見 活動の最後の金曜・土曜の2日間で居酒屋を開いて、島の人などみんなが集まれる場を作ります。

大弓 「なんでも隊」は、昨年現場で思いついたことで、今年から取り組みます。

司会 個人のプロジェクトは、誰がなにをするの?

大弓 僕は「居酒屋てん」を今年も継続してやる予定です。島民の方から教わった料理をメニューとして出したい。島の人に聞いてみたら、名産のタコを使った「タコのかき揚げ」を紹介してくれました。札幌ではあまり聞きませんが、島では一般的な料理らしくて。島内にはスーパーのように惣菜を売っている店がなく、だからこそ島民それぞれが工夫して調理しているようです。たとえば、タコを茹でてから揚げるのではなく、生の状態で味付けして揚げるとやわらかくなるとか、工夫をしている。そういうことは普段食べている人しかわからないと思うので、調査しながら活動したいと思っています。

司会 6月の段階で話を聞いてきたんですね。大したもんだ。できれば定番メニューとして位置づけていきたいよね。みんなで試食しよう(笑)。

山本 僕は映画を上映したい。去年行ったときに、娯楽施設がなくみんなで集まって

楽しむ機会は限定的なのかなと感じました。映画上映をしたら、たとえば「てん」でやれば集まる機会になるのでは。いつも学生の活動を支えていただいている島民の坂本学さんからは、「島の歴史がわかるもの、子どもからお年寄りまで共有できるものがあつたほうがいい」と提案があったので、これから探そうと思っています。もう一つは、保育所の子どもたちとの触れ合い。今までフィールドワークで子どもたちのところを訪ねることはなかったので、どういった交流が期待できるのか、新たな試みとして考えています。

高見 予定しているのは、小中学生との交流。去年、島の子どもたちは「てん」にあまり来てくれなかったんで、どういうことを考えているのを知りたいと思いました。島の小中学校を訪問して、可能であれば授業で大学の紹介もしたいです。

佐藤 僕は高齢者に特化したボランティアをしたいと思っています。去年「居酒屋てん」をやったとき、遠方に住んでいて来られないお年寄りの方がいたので、今まで関われなかった人と交流を持ちたいと考えました。話し相手になったり、掃除や家事を手伝ってほしいなどの悩みに対応できるように動こうと思っていますが、まだ具体的ではなく検討中です。

齊藤 私はアルバム作り。このフィールドワークは参加期間が2年で終わるので、学生が入れ替わると島の人とのことがわからなくなってしまうのがちょっと残念だなと思っていました。次の年の学生に「この人に、こういうことをしてもらったんだよ」と伝えられるように残していきたい。島の人にも「今年はこんな学生だったんだ」とわかってもらえるようにアルバムを渡せれ

ECON. STUDENTS



2023年11月に行われた学内報告会(3枚とも)



2024年2月発行





●司会
地域経済学科
大貝 健二 先生



●司会
地域経済学科
水野谷 武志 先生



●2部経済学科
3年
齊藤 百花さん



●1部経済学科
4年
佐藤 旭さん



●1部経済学科
4年
高見 海晴さん



●1部経済学科
2年
稲上 梨奈さん



●2部地域経済学科
3年
山本 幸一さん



●2部地域経済学科
3年
大弓 叶多さん

ば、2年目は顔と名前が一致して、コミュニケーションしやすくなると思います。

司会 稲上さんは初めての活動ですが、どういことをする予定ですか？

稲上 地域の一次産業に興味があり、漁師の方の手伝いを軸に考えていたんですが、6月の訪問でやりたいことが増えました。それは、小中学生と大学生のコラボ商品作りです。小中学校の教頭先生と話したとき、高校生と商品作りをしている大学はあるけれど、小中学生とコラボしているところはないと聞きました。食でも物でもいいのでなにか残したい。今年で形にして、来年改良して出したいと考えていますが、島外の方に「ふるさと納税」のように一年中出せるものを作るか、学生が来たときに島の中で必ず出すものにするか、悩んでいます。

司会 それはぜひ形にしたいですね。みんなテーマがユニークで面白い。去年の経験を踏まえてということもあるだろうし、まずやってみようと思いついたこともあるだろうし。8月にどんな結果になるか楽しみです。

続けるからこそ見えてきた島の魅力と可能性

司会 2年続けていると島の人の反応が見えてきて、それがフィールドワークを行う意味になっていると思います。継続してよかったと思うことや、気づきはありましたか？

齊藤 去年よく話をしてもらった人が、今年会ったら声をかけてくれました。数えるほどしか行っていないのに「まだバイトしてるの?」とか、覚えてくれてるのがうれしかった。

佐藤 島から帰ってから友達やアルバイト先の人に「天売島はすごくよかったよ」と話したら、「天売島に行ってみよう」という声や、中には「天売島へ行って来た」という人もいました。自分が魅力を知って伝えることで、天売島に興味を持ってもらったのがとてもうれしかったです。

山本 コロナ禍もあって、今まで人と関わることがあまりなかった中で、去年のプロ

ジェクトのメンバー同士がすごく親密になったこと。仲間や先生方との出会いに感謝です。

大弓 島民の方が、札幌からきた学生を温かく迎え入れてくれて、気にかけてくれる。その優しさが活動のモチベーションになりました。島という限られた中では住民同士の距離が近くて、すれ違ったら挨拶をかわすなど自然にコミュニケーションできているのがすごくいいなと思う。札幌との文化の違いを学びました。

高見 僕は休職して大学で学んでいるので、社会人では絶対にできないことや、日常生活とは違う体験ができて楽しいです。ただ反省点もあって、去年は「てん」に来る人のためにしか動いていない自分たちに対して、坂本さんから「なんのためにこの活動をやっているの?」という厳しい言葉をもらいました。その夜、なにをすべきかみんな話合ったときに、足が悪くて「てん」に来られない高齢者の方にも活動を見てもらおうと、宅配サービスや「なんでも隊」の話が出ました。それを今年のプロジェク



トとして生かされたのがよかったと思います。

稲上 私は1年目なので、みんなの話を参考に頑張りたいと思います。

司会 私たち教員は、学生の成長や変化に地域協働フィールドワークの可能性を感じています。そして、地域側の変化も感じている。あなたたち学生が地域に入ることによって新たなコミュニケーションや活力などが生まれ、島も少しずつ変化しています。なにが地域活性化なのかは定義できませんが、地域を元気にすることにつながっていると感じ、私たちも刺激を受けています。今年も、自分自身で考えたことを実践していく中で成長する、そういう学生に期待しています。皆さん、8月はぜひ頑張ってプロジェクトを形にいきましょう！

— 地域協働フィールドワークのねらい、目的 — 大貝 健二 教授

地域協働フィールドワークは、2016年度から実施している科目です。中・長期に渡って学生が地域に滞在し、地域の方たちと関わり合いを持ちながら様々な地域活動を通じて、地域の魅力を学び、課題や可能性を考え実践することを目的としています。

当初の思惑は、「地域を活性化できる人材を輩出したい」というものでした。北海学園大学の卒業生は、北海道経済をけん引していると言われていました。しかし、自転車の両輪のように、経済をけん引するとともに、多くの課題を抱えている地域を元気にできる人材も間違いなく必要です。そのような、いわば地域再生請負人が、同プログラムを通じて1人でも出てくることを期待しているのです。

地域協働フィールドワークは、これまで羽幌町・天売島で同フィールドワークを行っています。8年間の活動を通じて学んできたことは、コミュニケーションの重要性ではないかと思えます。これは、島の人たちと学生とのコミュニケーション、学生間のコミュニケーションの両方を指します。地道に多くの方々との対話を積極的に行い、地域の課題や可能性を仲間と共に考え、そして実践することによって、一方的に「何かをしてあげる」、あるいは「何かをってもらう」といった、従来ありがちな一方通行の関係性とは一線を画しています。学生たちによるプロジェクトの実践を通じて、島の方たちと新たな関係性を構築してきていると言っても良いでしょう。

最後に、同プログラムは、北海学園大学経済学部、受け入れ団体として、一般社団法人天売島おらが島活性化会議、コーディネーターとしてNPO法人北海道エンブリッジとの連携、協力体制を基に実施しています。



2019年度の報告会・地域連携強化推進事業シンポジウム

この春に卒業した学生から提出された34本の卒業研究論文には、苫小牧市のIR推進、国民年金第3号被保険者の課題、北海道における日本酒生産、eスポーツによる地域振興、旧産炭地の生活文化、GISによる津波避難者数の推計、など多様な論点がみられ、経済学部の懐の深さが窺えました。これらのなかで内容が秀でていと評価された5名にたいし、去る3月7日に江川賞が授賞されました。この5名のうち内容が特に秀でていと評価され、最優秀論文と認定されたのが菅原颯太さんの論文「札幌市にみる都市農業の特性と地域農政の課題」です。石井健経済前学部長の評言によると、この論文は札幌市で行われている都市農業の実態と課題についての手堅い実証研究であると高く評価されています。なお、最優秀論文についてはその全文が、それ以外の論文についてはその要旨が、卒業研究論文要旨集に記載されています。

卒業研究は、経済学部での勉学および研究の集大成ともいえます。学生のみなさんが、おのおのの関心や問題意識をもとに、貪欲に取り組むことが大いに期待されます。(卒業研究委員 中園)



卒業研究論文の総評を述べる石井健前経済学部長。左は卒業研究論文要旨集。卒業研究論文要旨集は下記URLに掲載
<https://econ.hgu.jp/publication>



卒業研究論文優秀論文「第5回江川賞」授賞式(3月7日)。写真上:表彰者と教員の皆さん。石井健経済前学部長(左端)と担当教員の藤田知也准教授(左から3人目)、牛久晴香准教授(左から5人目)を間に、左から石橋侑将さん、小原梨紗さん、菅原陸人さん、菅原颯太さんと濱田武士教授(右端)。写真下左:石井健前経済学部長から最優秀論文の表彰を受ける菅原颯太さん。写真下右:表彰を受けた皆さんが挨拶を述べました。

皆さんは大学に入学したのはいいものの、大学でどのように勉強していけば良いかという不安を持ってないだろうか。そのような不安を少しでも減らす機会として、基礎ゼミナール(基礎ゼミ)と呼ばれる初年次教育を行なっています。基礎ゼミは1年間を通して、15名程度のメンバーで行われるゼミ形式の授業です。

大学での学びを深める上で、アカデミック・スキルと呼ばれる学修・研究の技術の習得が基礎ゼミの一つの目的です。基礎ゼミは、ノートの取り方や、関心のあるテーマを見つけてレジュメやレポートを作成し、自分の研究結果をプレゼンするための様々なスキルを

身に付ける機会となります。

さらに、アカデミック・スキルの習得だけが基礎ゼミの目的ではありません。大学には高校までのような「クラス・学級」がないため、基礎ゼミが広く学友を作る機会にもなっています。同じ曜日に開催される基礎ゼミ同士で交流したり、基礎ゼミごとに独自の活動を行ったりしています。

今後の学修のため、そして新たな大学生生活を充実させるため、基礎ゼミで積極的に取り組むことを希望しています。(比嘉)



写真は基礎ゼミ(比嘉担当)
写真①④:ゼミ内でのプレゼンテーションの様子、②③:基礎ゼミ(比嘉担当)の懇親会の様子

『皆さんは社会の豊かさに寄与するのか？』

経済学では技術進歩が経済の豊かさに大きく影響する点が強調されます。マクロ経済学の授業やゼミなどでソローモデルを勉強されたことがある学生は、技術進歩のみが持続的な生産性の上昇つまり豊かさの源泉となることを学んだことでしょうか。もしかしたらこの結論にテキストで論じられている点とは全く別の点で衝撃を受けた学生もいるのではないのでしょうか。つまりそれは「我々は豊かさに寄与しないのか？」という衝撃です。経済学を学んで、卒業後は公務員や会社員として社会に貢献するでしょうが、技術進歩をもたらすような（理系っぽい）発明には縁遠そうです。

技術には様々な性質のものがあありますが、経済全体の性質を変えるような技術は一般目的技術と呼ばれます。この技術が持つ重要な特性として、①経済の多くの産業部門内で生産方法を変化させる②社会・経済のあらゆる分野におけるイノベーションにつながる、の2点が挙げられます。例としては、蒸気機関、電気、自動車、情報技術などが挙げられます。いずれも社会の豊かさを大きく変化させた技術であることに異論はないでしょう。ただしこれらの技術の発明に伴い社会が突然豊かになったわけではないのです。

過去の一般目的技術の効果の発現には通常タイムラグが生じています。例えば電気の発明に伴い工場が電化されましたが、それほど生産性は向上しませんでした。理由は簡単で、工場内の機械や人員の配置が蒸気エンジンの時代と同じだったからです。蒸気エンジン

よりも小さな電気モーターはどこにでも配置できるため、この性質を利用すれば、機械や人員の効率的な配置を優先できる点に気が付き実践した時、大きな生産性の変化が訪れました。情報技術についても同様です。情報技術の始まりは1971年にマイクロプロセッサが初めて開発されたときですが、生産性への大きな変化は95年のアメリカまで待つことになります。生産性上昇のきっかけはウォルマートでした。同社は情報技術を用いることで同社の物流の効率性を改善し、急速な拡大を実現しました。その後ウォルマートの手法を他社も見習い、社会全体での大きな生産性の増加につながったと考えられています。

以上から、技術進歩が社会の生産性を拡大するためには、その技術が適切に応用されることが必要であり、そのためには日々の改善が必要とされていると言えるでしょう。さて、改めて質問ですが、皆さんは豊かさに寄与しないのでしょうか。

Paul A. David (1990) "The Dynamo and the Computer: An Historical Perspective on the Modern Productivity Paradox" American Economic Review, Vol.80, No.2, pp.355-361

クルーグマン、ウェルス『クルーグマン マクロ経済学』（東洋経済新報社）

ワイル『経済成長』（ピアソン）

NEWS 3

市民公開講座開催

2024年7月6日 テーマ「公共の再生と担い手—自治体消滅が話題になる中で考える」

7月6日に本学市民講座「公共の再生と担い手—自治体消滅が話題になる中で考える」が開催され、多数の市民の方々が来場しました。この日は元自治体職員の前田賢一氏、本学経済学部教授の内田和浩氏、おなじく経済学部教授の川村雅則氏が講演し、その後、全体的な議論が交わされました。

内田教授によると、昨今では地域の「全日住民」が減少するとともに、自治体・自治体行政にかんする含意に幅が生じており、従来は自治体にゆだねられていた業務が民間に委託されたり広域自治体に移管されたりする傾向があります。「公共」概念がさまざまに用いられるのが現状ですが、「自助や共助、そして民間企業にはできない地域住民みんなのための仕事」が、地域の公共であるべきだと考えられます。

労働問題の専門家である川村教授の講演では、そもそも日本社会は30年～40年来、はたらく者の労働条件を大事にしてこなかったものであり、公共サービスについても、それを担う人々が大事にされておらず、この人々の労働条件をいかに確保するかが肝要であると強調されました。たとえば保育・介護・図書館業務などの仕事を担う人々が地域で食べてゆける職場がぜひとも必要だといえます。

とりわけ近年では非正規職員の待遇改善が喫緊の課題であり、北海道でいえば、札幌市以外の市の職員の38.7%が非正規、町村の45.5%が非正規です。〈はたらく貧困層〉の生計は不安定を余儀な

くされがちですが、それは公務員も同様だと川村教授は力説しました。大きくいえば経済や政治の転換が求められるといえるでしょう。（水野）



写真上：パネルディスカッションの様子。写真下左：パネリストの皆さん、左から川村雅則教授、内田和浩教授、自治体研究者前田賢一さん。左は受講者からの質疑。



比嘉 一仁 経済学部准教授

ひが かずひと

<略歴>

沖縄県中頭郡北中城村出身
一橋大学大学院経済学研究科 博士後期課程修了、博士
(経済学)

専門は応用計量経済学

主な研究業績・著書:

・"Employment Adjustments of Regular and Non-Regular Workers to Exogenous Shocks: Evidence from Exchange-Rate Fluctuation," *Industrial and Labor Relations Review*, 74(2), 2021. (joint work with Izumi Yokoyama and Daiji Kawaguchi)

・"Migration and Human Capital: Evidence from Japan," *Journal of the Japanese and International Economies*, 54, 2020. (joint work with Ryota Nonaka, Testuya Tsurumi, Shunsuke Managi)

●写真について

沖縄県宜野湾市にあるトロピカルビーチにて。
近くに住んでいたので、子供とよく散歩していました。

私の履歴書

南国から北国へ ~新たな挑戦~

やらされていた勉強

私は特に勉強が好きではありません。どちらかというと嫌いです。沖縄の長男として両親の期待を一身に背負い、通信教育やら塾やら習い事をやらされてきた私にとって、勉強というのは「やらされるもの」でした。一応、宇宙飛行士になって空を自由に飛びたいという夢があったので、嫌々ながらも勉強はしてきました。それでも、「やらされている」と感じているものは成果につながらず、中学受験にも高校受験にも失敗し、高校2年の模試の結果を見ると宇宙飛行士になれないことは明らかでした。傷心のなか琉球大学に入学した私は、受験の日々が終わった解放感と目標にたどり着けなかった喪失感で、これからの人生をどう生きたらいいかわからなくなっていました。燃え尽き症候群などというのではなく、嫌いだけど義務だった勉強がなくなり、本当に何をすればいいのかわからなくなったのです。

大学1年生の時、父の知人がアメリカ留学を勧めてくれました。沖縄とアメリカの交流を深める事業をされている方で、彼が



父の友人だったため、私にこの話がやってきたのです。沖縄の地縁社会と留学のきっかけを作ってくれたAさんには感謝してもしきれません。私は、自分の人生と向き合うことからいったん逃げることにして渡米しました。本当は何がしたいのか、何に向いているのかわからないまま、英語の習得と講義に忙しくしているうちに、あっという間に1年が経ちました。どんな成果があったかは分かりませんが、不思議と達成感と自信を手に入れて帰国した私は、何かに真剣に打ち込みたいと思うようになっていました。

計量経済学との出会い

この現実逃避のアメリカ留学が、私の運命を変えることになりました。琉球大学に復学した私は、何気なく取った授業で、計量経済学と出会いました。経済学には様々な分野がありますが、計量経済学は数学的な思考が必要とされる分野で、数学が得意な私にぴったりな分野でした。嫌々ながら頑張った受験勉強で、唯一の得意教科だった数学が、実社会の研究へと繋がって活か

033 OG訪問 働きウーマン



大学生としての経験が一つずつ、今の自分につながっています。

ディップ株式会社
営業職・採用コンサルタント

野田 あおいさん

のだ あおい

●自分で考え、行動できるようになった学生時代

高校生の頃から韓国アイドルや文化が好きで、そこから経済や社会のことも知りたくなり、アジア経済を学ぶことができる大学を探しました。釧路の親元を離れて一人で暮らしたいという希望もあり、札幌の北海学園大学に進学しました。

大学時代は親の支援なしに通いたかったので、サークルには所属せず、学業とアルバイトの2軸で過ごしました。特に2年次から選択した水野ゼミでは、北海道と韓国の歴史や経済学的な関係など、今まで見えていなかった事柄を学ぶことができたと思います。何度か韓国旅行もしましたが、知識を得るとさらに興味が湧き、「このゼミに入って良かった」と実感しました。1年次までの「聞くこと」が中心の講義と違い、ゼミは自分がどう考えるかを書いたり、発表したりする機会もあり、自分なりに成長できたと思います。そのほか、大学生になってから高校時代と比べて何事も自分で決める機会が増えました。以前は家族や友人に頼る部分が多かったのですが、



写真上3点:韓国旅行で。写真下:大学時代、水野ゼミ地域研修集合写真、幌加内町「笹の墓標展示館」前で

されている分野だと感じました。恩師となるS先生は当時着任したばかりで、私が1年間のアメリカ留学をしなれば出会うことはありませんでした。S先生の授業とゼミで一生懸命に計量経済学に打ち込み、やっと自分が頑張りたいと思えるものに会えたという確かな手ごたえを感じました。S先生と出会い、研究者という生き方があると知り、計量経済学の分野で研究者になることを目指して勉強を始めました。初めて、「やらされている」のではなく、自ら学びたいという気持ちで勉強と向き合うことが出来たのです。ただ、嫌々ながらも受験勉強をしてこなければ、計量経済学の楽しさを理解することが出来なかったことを考えると、自分に合った学問に出会うための土台作りをしてきた過去の自分と、勉強をさせてくれた両親にも感謝したいと思います。また、S先生に出会わなければ、今こうして「私の履歴書」を書いたり、北海学園大学で教えたりすることがなかったと思うと、研究者への道を教えてくれたS先生には大変感謝しています。

東京の大学院に進学した私は、これまでにないほど勉強に明け暮れました。周りは就職する中で、自分だけ先の見えない大学院生活に突入する不安もありましたが、ここまできたら研究者になるしかないという覚悟を決めて頑張りました。大学院で学ぶ内容は、学部頃とは桁違いに難しく、本当に同じ学問なのかと思うほどでした。ちなみに私は、本を読むのが大嫌いです。研究者

では珍しいタイプかもしれませんが、そもそもじっとしているのも苦手です。それでも、自分がやりたいことなので頑張ることが出来ました。

在学中に、フランスにある研究機関、経済協力開発機構(OECD)でインターンをし、8か月間グローバルな環境で研究を行いました。豊かさの変化を人々の検索キーワードから予測することが出来るかというテーマについて、様々なバックグラウンドを持つ研究者たちとチームで研究を行いました。大学とは違う環境で研究するのは初めてでしたが、とても良い経験になったと思います。インターン終了後には大学院に戻り、博士論文の執筆に取り組みました。博士論文の執筆は、研究者として活躍するための第一歩となる重要な課題であり、学友や大学院の指導教員K先生には感謝しきれないほどサポートを受けました。そして九州大学、内閣府の研究所での研究生生活を経て、沖縄国際大学に就職しました。沖縄国際大学では、データを用いて経済現象を分析するデータ解析論という講義を主に担当しました。コロナ禍で対面での授業がなかなかできず、歯がゆい思いもありましたが、データ分析や経済学の楽しさを私なりに伝えられたように思います。

「今後」に挑戦

計量経済学に出会えたこと、そして研究に打ち込み、大学で教育・研究が出来るようになったことは、いくつもの幸運の積み



重ねたのだと思います。何がしたいかわからなかった大学入学時の私は、自分がやりたいことを見つけ、七転八倒しながら研究に勤しみ、さらにいろんなことに挑戦したいと思えるまでに成長しました。沖縄で生まれ育った私が、なぜ北海道の大学に来ようと思ったのか、実は上手く説明することが出来ません。南の端と北の端、真逆のようで、共通点もあるような、そんな北海道になぜか心惹かれ、ここを新たな研究拠点とすることで、また幸運な巡り合わせがあるような気がします。私は宇宙飛行士にはなれませんでした。自分に合った学問を見つけることが出来ました。やらされた勉強と、自らやった勉強、そして人との出会いの結果、私はここにいます。皆さんの周りにも人生を変えるようなきっかけを与えてくれる人や、皆さんの夢・目標を支えてくれる人がいると思います。そのような人々に感謝を忘れず、自分の夢に向かって挑戦してほしいと思います。その時その時、出来るだけの努力をすれば、きっと何かに繋がっていきます。いつか出会う「人生の転機」に備えて、今という時間を大切にしてください。

学業もアルバイトも、まずは自分が何に興味を持っているか考え、自分主体で動けるようになりました。

●コロナ禍で臨んだ就職活動

就職活動は業界を絞らず、幅広い業界について調べることからスタートしました。コロナ禍でエントリーできる企業が減り、説明会もオンラインがほとんどで、移動時間がない分インターネットを活用して情報収集に集中しました。大変でしたが、このときに頑張っているいろいろな情報を集めたことは、今の求人情報サービスの仕事にも生きています。

ディップ株式会社に就職を決めたのは、オンラインの面接や面談の機会が多く、先輩や管理職クラスの社員がしっかり向き合って話をしてくれた点が理由の一つです。また、大学時代のアルバイトを通して「有期雇用の価値を高めたい」という気持ちが芽生えたことも大きな理由です。私のアルバイト先は働きやすく、だからこそ4年間も続けられたのですが、そうでないケースもあります。働く人と採用する企業が、一緒に良い環境を考えられる機会が増えればいいな、と何となく考えていたので、「この会社なら働く人と企業をつなぐ仕事ができる!」と思いました。

●「自分から学びに行く姿勢」を大切に

現在の仕事内容は、企業に「求人広告を出しませんか」と提案する営業活動です。いろいろな業界や企業に合わせた求人内容を自分で組み立て提案し、自社の求人サイトに掲載し、採用状況や定着率などを確認して、次の改善策などを提案するアフターフォローまでを担当します。効率的に分業している会社もありますが、一貫して

やるのが会社の方針。その中で、私は掲載後のアフターフォローを特に大事にしています。就業者や企業へ直接インタビューを行い、何度も求人を出さずに済むよう、成功する形を一緒に作っていきたいと思っています。ときどき、就業者から「ここで働けて良かった」、企業からは「野田さんに任せて良かった」という言葉をいただけることがあり、やっけて良かったと思う瞬間です。

私は大学で何か大きな功績を残したわけではなく、就活初期は「学生時代に力を入れたことは?」という質問に悩みましたが、ゼミもアルバイトも、一人暮らしも就職活動も、大学時代のいろいろな経験が全部、今につながっています。どんなことも「自分から学びに行く姿勢」を持ち続けていけば、それが将来の自分の価値につながると思います。



●1999年生まれ
北海道釧路明輝高等学校出身。
2022年3月、本学経済学部地域経済学科を卒業後、インターネットの求人情報サービス企業・ディップ株式会社に入社。企業と求職者をつなぐ採用コンサルタント業務に従事。

去る7月27日、本学経済学部出身の作家・河崎秋子さんの講演がおこなわれました。河崎さんは「東甌遺事」「土に贖う」「颯風の王」などの作品で種々の文学賞を受け、今年「ともぐい」で直木賞を受賞しています。

講演では、河崎さんが本学学生時代に授業で北海道経済の歴史を学ぶとともに、テーブル起こしなど歴史を掘り起こすアルバイトをおこない、公式的な歴史より、ひとりひとりの体験として語られる庶民の歴史におおきな関心をいただいたところから、話が始まりました。大学卒業後はニュージーランドで羊の勉強をしたり、ひつじ農家・やぎ農家に住み込みで働いたりした「寄り道」を経て、ご実家で酪農にたずさわる多忙な日々を迎えた河崎さんは、学生時代に小説を書いていたことを思い出し、睡眠時間を削ってふたたび小説を書きはじめます。時間のやりくりに苦心するなか、牛や羊の仕事はいったん中断しても再開できるけれども、いまの自分に書ける小説は、あとになっては書けないと思うにいたったそうです。

河崎さんの小説は〈北海道の昔の話〉が基本で、当時の人々がどのような状況でなにを感じていたか、どういう立場でどういう苦勞をしてきたか、これらのことが現代の人々にも届くように書くことが心がけられています。たとえば本州から連れてこられた馬が北海道でどのような処遇を受けてきたかを語りつつ、人と馬とが近い存在であったことが描き出されます。大雪で学校から帰れなくなった児童を連れて帰るために、急いで医師や産婆さんを自宅に連れてくるために、花嫁を迎えるために、馬が活躍したことが紹介されました。

北海道は開拓の華々しい歴史が語られることが多いでしょうが、その裏面には、人々の苦痛の歴史が厳として存在します。この点を河崎さんはたびたび強調され、北海道に住む私たちの意識が刺戟される講演でした。

講演後には会場の聴衆から数々の質問が出され、興味深い応答がなされました。(水野)



写真右上・下…講演する河崎秋子さん、左上…河崎さんに質問する本学学生

皆さん、大学での学び、生活はいかがでしょう。就職活動はまだまだ先のことに感じる人もいるかもしれませんが、少し話を聞いてください。近年の就職活動ではインターンシップへの参加の重要性が増しています。企業は学生のコミュニケーション能力や職場適応力を重視していますし、皆さんにとってもミスマッチは避けたい、本格的な就活の前に業界のことを体験的に知りたいというのが背景にあるのでしょうか。未知の職業世界を体験しつつ、自分自身を探究し、将来のキャリアに対する具体的なビジョンを得ることができる、それがインターンシップです。

本学の「GIP (Gakuen Internship Program)」では、計画的にインターンシップに参加できるよう、以下のスケジュールで進めています(2024年度の例)。

◆3年次◆

- 4月: 申し込み開始、事前研修①(目標設定)
- 5月: 事前研修②③(自己分析セミナーなど)
- 6月: 事前研修④⑤(社会人講話、マナー講座)
- 7月: 事前研修⑥(直前ガイダンス)
- 8・9月: インターンシップに参加
- 10月: 事後研修①②(成果報告会など)

◆GIPのポイント◆

- ①自分の将来を真剣に考える: 「働く未来を考えてみる講座」や「自己分析」などを通じて、将来像を具体化します。
- ②自分に合う企業を知る: 自己分析を行い、自分の強みや課題を把握し、組織風土や働き方に合ったインターンシップ先を選定します。
- ③みんなの経験を共有する: インターンシップ後の成果報告会で、他の学生や企業の視点を学びます。

これまで多くの学生が道内外の企業・官庁でインターンシップに参加しています。経済学部生の例としては、生活協同組合コープさっぽろ、鶴雅リゾート、国際協力機構(JICA 北海道)、遠軽町役場、留萌市役所、財務省北海道財務局・・・など。興味、関心を持たれた方は是非、大学のサポートを活用し、インターンシップに挑戦してみてはいかがでしょうか。(歌代)



写真2点: 事前研修⑥直前ガイダンスの様子(2024.7.13)

